岡山芸術交流
Okayama Art Summit
2025
9.26–11.24

展覧会タイトル発表会

２０２４年１１月１２日
岡山芸術交流実行委員会

展覧会タイトル / ステイトメント

青豆の公園

村上春樹の小説『1Q84』に登場する謎めいたキャラクター「青豆」に触発された「青豆の公園」が岡山市内にて展開される。相互に結びついたこれらの公園は、現実と空想が交わる場として、青豆の静かな葛藤や二つの並行する世界に生きる複雑な存在を映し出すものとなる。

「岡山芸術交流 2025」は、岡山の都市空間を現実と想像が自然に交わる場へと変貌させる。この壮大なプロジェクトは、岡山の公共空間、忘れられた場所、市民公園などを再構築し、驚きに満ちた地図を作り上げる。

この芸術交流は単なる視覚芸術の展示にとどまらない。その核には、独自の表現で新しい形を生み出すアーティストや音楽家、建築家、デザイナー、科学者、作家、思想家たちが世界中から集結する「ギルド」が形成される。

シェヘラザード・アブデルイラー・パレーノ、マリー・アンジェレッティ、マルティーヌ・ダングルジャン＝シャティヨン、アルカ、アニルバン・バンディオパダヤイ、ニコラ・ベッカー、イアン・チェン、ジェームズ・チンランド、メアリー・ヘレナ・クラーク、マティ・ディオップ、フリーダ・エスコベド、FABRYX、シプリアン・ガイヤール、ニコラ・ジェスキエール、リアム・ギリック、ホリー・ハーンダン&マシュー・ドライハースト、Isolarii、アレクサンドル・コンジ、ミレ・リー、ルクレシア・マルテル、中田英寿、ハンス・ウルリッヒ・オブリスト、プレシャス・オコヨモン、レイチェル・ローズ、ディミタール・サセロフ、ティノ・セーガル、島袋道浩、サウンドウォーク・コレクティヴ、ラムダン・トゥアミ、アンガラッド・ウィリアムズが参加する。

この多様なメンバーは、岡山を有機と合成、生物と人工物、現実と仮想が融合する実験の場に変える。岡山は考察の場となり、ギルドによって市民や来訪者が異なる瞬間や形態に触れる二か月間が始まる。日中だけでなく夜間もまた、特別な出来事が生起する。

「青豆の公園」は、横断歩道がステージに変わり、広場が交流と回想の場へと変容する、屋外展覧会である。日常の行き交いが発見の瞬間に変わり、トリエンナーレは多様な想像の場面を展開するものとなる。この体験の中心となるのが、街中に点在する作品群をつなぐルート、「青豆の道」である。歩みを進めるごとに、そこには小さくも儚い驚きが待ち受け、都市を巡る中で架空の物語が芽生え進化していく。ある場所で生まれたアイデアが都市空間を通じて成長し、思想や体験が相互に交わり合うことを促すのである。

岡山は単なる背景ではなく、この実験に参加する存在そのものとなる。

それぞれの作品やパフォーマンスは、岡山の都市空間に物語の層を重ね、並行する現実が都市のもう一つの姿を垣間見せる。物語の交差点では、訪問者が都市内で自身のルートを選びながら旅を進めることができる。都市全体が読み取られ、解釈され、書き換えられるテキストのような存在となる。街頭標識や建物の外壁、公共のアナウンスが架空の要素を反映し、都市の実際の歴史と想像の物語との境界が曖昧になるだろう。

市民や来訪者が集い、岡山の住人たちの夢や思いをこのトリエンナーレの物語に織り成していくことが求められる。芸術イベントと日常生活の境目は薄れ、架空のサービスや時のずれ、異なる歴史を記した銘板や碑などが実際の歴史的な記念物と一体となり、街並みに新たな歴史が刻まれるのである。

皆さんとお会いできるのを楽しみにしている。これは、きっと素晴らしい体験となるだろう。

アーティスティック・ディレクター
フィリップ・パレーノ

Exhibition Title / Statement

The Parks of Aomame

Inspired by Haruki Murakami's enigmatic character, Aomame, from his novel *1Q84, The Parks of Aomame* will run through the city of Okayama. These interconnected parks, both real and imagined, will draw upon Aomame's silent struggles and her complex existence within two parallel worlds.
The Okayama Art Summit 2025 will transform the city into a realm in which reality and imagination blend seamlessly. This ambitious event will reimagine Okayama's public spaces, forgotten corners and urban parks, creating a map of wonder.
This forthcoming summit is not simply a visual art exhibition.
At the heart of it is a curated Guild of artists, musicians, architects, designers, scientists, writers and thinkers from all over the world — each selected for their unique ability to inspire and provoke new forms.
This diverse Guild includes Schéhérazade Abdelilah Parreno, Marie Angeletti, Martine d'Anglejan-Chatillon, Arca, Anirban Bandyopadhyay, Nicolas Becker, Ian Cheng, James Chinlund, Mary Helena Clark, Mati Diop, Frida Escobedo, FABRYX, Cyprien Gaillard, Nicolas Ghesquière, Liam Gillick, Holly Herndon and Mathew Dryhurst, Isolarii, Alexandre Khondji, Mire Lee, Lucrecia Martel, Hidetoshi Nakata, Hans-Ulrich Obrist, Precious Okoyomon, Rachel Rose, Dimitar Sasselov, Tino Sehgal, Shimabuku, Soundwalk Collective, Ramdane Touhami, and Angharad Williams.
Together, this group will transform the city into a laboratory where the organic and synthetic, the biotic and artificial and the real and virtual merge.
Okayama will become a site of speculation where the citizen and visitor will be exposed by the Guild to different moments and forms that will occur for the two-month period of the summit- this time being the time of an exposure. Things will happen by day but also by night.
The Parks of Aomame will be an open-air exhibition in which pedestrian crossings turn into stages, and city squares evolve into spaces for reflection and exchange transforming everyday interactions into moments of discovery. The triennale will open up multiple imaginative scenarios. Central to this experience will be to follow the "Aomame Path", a route connecting the various interventions scattered throughout the city. As you walk this path, you will be exposed to small, ethereal and surprising interventions. You will experience the emergence of a fiction through the city. Ideas sparked in one location will evolve and travel through the urban landscape, encouraging the cross-pollination of thoughts and experiences.
Okayama will become not just a backdrop but a participant in this experiment.
Each intervention and performance will add a layer of narrative to Okayama's urban fabric: parallel realities will offer glimpses into alternative versions of the city, Character-Inhabited Zones will be 'inhabited' by fictional characters, and narrative crossroads will allow visitors to choose their own path through the city.
The city will become a text to be read, interpreted, and rewritten. Street signs, building facades, and public announcements might subtly be altered to reflect fictional elements, blurring the line between the city's actual history and imagined narratives.
Residents and visitors alike will be invited to gather and weave together the dreams and imaginings of Okayama's residents into the Triennale's evolving storyline. The line between art-event and daily life will become blurred through fictional services, time slips in which clocks and calendars operate differently, and alternate histories commemorated by plaques and monuments seamlessly integrate with real historical markers.
We look forward to meeting you there…it is going to be so fun.

Artistic Director: Philippe Parreno

キービジュアル

©Okayama Art Summit 2025
Left: Photo by Andrea Rossetti

©Okayama Art Summit 2025
Left: Photo by Andrea Rossetti

©Okayama Art Summit 2025
Right: Photo by Gautier Deblonde

©Okayama Art Summit 2025
Left: Photo by Andrea Rossetti

©Okayama Art Summit 2025

参加ゲスト

一覧（出生地、生年）

1	シェヘラザード・アブデルイラー・パレーノ （フランス、1979年）	**Schéhérazade Abdelilah Parreno (b. France, 1979)**
2	マリー・アンジェレッティ （フランス、1984年）	**Marie Angeletti (b. France, 1984)**
3	マルティーヌ・ダングルジャン＝シャティヨン （アメリカ、1963年）	**Martine d'Anglejan-Chatillon (b. USA, 1963)**
4	アルカ – アレハンドラ・ゲルシ （ベネズエラ、1989年）	**Arca - Alejandra Ghersi (b. Venezuela, 1989)**
5	アニルバン・バンディオパダヤイ （インド、1975年）	**Anirban Bandyopadhyay (b. India, 1975)**
6	ニコラ・ベッカー （フランス、1970年）	**Nicolas Becker (b. France, 1970)**
7	イアン・チェン （アメリカ、1983年）	**Ian Cheng (b. USA , 1983)**
8	ジェームズ・チンランド （アメリカ、1971年）	**James Chinlund (b. USA, 1971)**
9	メアリー・ヘレナ・クラーク （アメリカ、1983年）	**Mary Helena Clark (b. USA,1983)**
10	マティ・ディオップ （フランス、1982年）	**Mati Diop (b. France, 1982)**
11	フリーダ・エスコベド （メキシコ、1979年）	**Frida Escobedo (b. Mexico, 1979)**
12	FABRYX （アメリカ/フランス、2023年設立）	**FABRYX (USA / France, Established 2023)**
13	シプリアン・ガイヤール （フランス、1980年）	**Cyprien Gaillard (b. Paris, 1980)**
14	ニコラ・ジェスキエール （フランス、1971年）	**Nicolas Ghesquière (b. France, 1971)**
15	リアム・ギリック （イギリス、1964年）	**Liam Gillick (b. UK, 1964)**
16	ホリー・ハーンダン ＆ マシュー・ドライハースト （アメリカ、1980年／イギリス、1984年）	**Holly Herndon & Mathew Dryhurst (b. USA, 1980 / b. England, 1984)**
17	Isolarii （イギリス、2020年設立）	**Isolarii (Founded 2020, London)**
18	アレクサンドル・コンジ （フランス、1993年）	**Alexandre Khondji (b. France, 1993)**
19	ミレ・リー （韓国、1988年）	**Mire Lee (b. South Korea, 1988)**
20	ルクレシア・マルテル （アルゼンチン、1966年）	**Lucrecia Martel (b. Argentina, 1966)**
21	中田英寿 （日本、1977年）	**Hidetoshi Nakata (b. Japan, 1977)**
22	ハンス・ウルリッヒ・オブリスト （スイス、1968年）	**Hans Ulrich Obrist (b. Switzerland, 1968)**
23	プレシャス・オコヨモン （イギリス、1993年）	**Precious Okoyomon (b. 1993, UK)**
24	レイチェル・ローズ （アメリカ、1986年）	**Rachel Rose (b. USA, 1986)**
25	ディミタール・サセロフ （ブルガリア、1961年）	**Dimitar Sasselov (b. Bulgaria, 1961)**
26	ティノ・セーガル （イギリス、1976年）	**Tino Sehgal (b. England, 1976)**
27	島袋道浩 （日本、1969年）	**Shimabuku (b. Japan, 1969)**
28	サウンドウォーク・コレクティヴ （フランス、2001年創設）	**Soundwalk Collective (France, Created 2001)**
29	ラムダン・トゥアミ （フランス、1974年）	**Ramdane Touhami (b. France, 1974)**
30	アンガラッド・ウィリアムズ （ウェールズ、1986年）	**Angharad Williams (b. Wales, 1986)**

シェヘラザード・アブデルイラー・パレーノ

｜Schéhérazade Abdelilah Parreno（1979 年、フランス）

シェヘラザード・アブデルイラー・パレーノはパリを拠点とするアートディレクター、クリエイティブ・コンサルタント。応用美術を学び、2004 年に有名な ESAG Penninghen を卒業後、ロサンゼルスの映画スタジオでビジュアル・コミュニケーション分野でキャリアをスタート。その後、上海とバーレーンで働き、パリに戻る。ファッションとラグジュアリーの交差点で 20 年間を過ごし、2 次元と 3 次元のデザインを行き来しながら、両分野のクリエイティブ・マスターズにアドバイスし、パターン認識、空間記憶、プロポーション、プロジェクションを描くことに独自の才能を開花させた。公共空間、インテリアデザイン、ファッションから離れたアブデルイラーは、人間の経験とその環境に対するより深い理解に惹かれ、人間の究極の織物である皮膚の領域を探求し始めた。2018 年、彼女は空間として見る人間の結合組織の効果について探求し出した。新しいテクノロジーとそれが生物に与える影響に情熱を注ぐ彼女は、NASA や顔面再建の第一人者などが使用するマイクロカレントの有益な特性に注目した。ロンドンとパリでの厳しい修業期間を経て、パリ中心部にモモ・スキン・スタジオを設立。このスタジオは、心の安らぎと顔という景観の表皮と心理的なつながりに焦点を当てた先駆的な存在である。パレーノは、ファッションやアートの世界で最も有名な人たちとコラボレーションし、インスピレーションを与え続けている。フィリップ・パレーノの妻である彼女は、敷居の高い美術界に足を踏み入れる機会を与えてくれた夫に感謝している。

© Schéhérazade Abdelilah Parreno, Photo by Pilar Schacher

マリー・アンジェレッティ | Marie Angeletti（1984 年、フランス）

彫刻、ビデオ、写真、インスタレーションといった多様な手法を用いるアンジェレッティの自由奔放な実践は、日常の経験から生じる偶然や偶発的な出来事に反応するものである。状況が変化する中で、作品は常に流動的な状態にあり、常に進行中のものとして存在する。

マリー・アンジェレッティはニューヨーク在住のフランス人アーティスト。近年の展覧会に、Gaylord Apartments（ロサンゼルス、2024 年）、Lars Friedrich（ベルリン、2024 年）、Koelnischer Kunstverein（ケルン、2023 年）など。さらに、現代美術センター（ジュネーブ、2021 年）、パリ市立近代美術館（パリ、2017 年）、クンストラーハウス・ブレーメン（ブレーメン、2015 年）、ル・コンソーティアム（ディジョン、2015 年）、クンストハウス・グラールス（グラールス、2021 年）、（チューリヒ、2016 年）、Reena Spaulings（ニューヨーク、2023 年）、Edouard Montassut（パリ、2020 年）、Castillo/Corrales（パリ、2014 年）、Greene Naftali（ニューヨーク、2018 年）

© Marie Angeletti

マルティーヌ・ダングルジャン＝シャティヨン

| Martine d'Anglejan-Chatillon（1963 年、アメリカ）

マルティーヌ・ダングルジャン＝シャティヨンは、ロンドンを拠点に、アート、映画、ファッション、テクノロジーの交差点で活躍するクリエイティブ・プロデューサー。社会実験兼映画大作『DAU』、ラスベガス・スフィアのこけら落としとなった U2 の公演、ルイ・ヴィトンの大規模なファッションショーなど、カルチャー界で最も野心的かつ先鋭的なプロジェクトに携わってきた。2004 年にはロンドンの Thomas Dane Gallery の設立パートナーとして、フィルム、ビデオ、デジタルシミュレーションを専門に扱う。フィリップ・パレーノによって岡山芸術交流 2025 のキュレーターに任命され、現在はパレーノの長編映画を製作も行っている。2021 年に MDAC Productions を設立し、国際的に有名なアーティストをアートの隣接業界へ進出させる。ダングルジャン＝シャティヨンは、サマセット・ハウス（ロンドン）と、AI 時代における芸術機関の役割、意味、機能に関する研究を支援する財団「Art Institutions of the 21st Century（AI21C）」の理事を務めている。

© Lawrence Lek

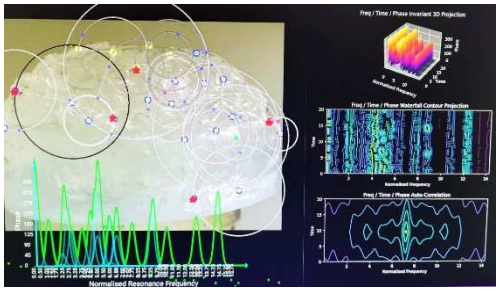
アルカ – アレハンドラ・ゲルシ | Arca – Alejandra Ghersi（1989 年、ベネズエラ）

アルカの手による超越的かつ逸脱的な作品群は、アーティストとアートの間、人間とテクノロジーの間、アヴァンギャルドとポップの間、そして音楽からビジュアル・アート、ファッションに至るまで、長年越えられぬと思われていた障壁を崩壊させ、彼女の消えない足跡を残した。2021 年の KICK シリーズは、アルカのキャリアに新たな局面をもたらし、実験的な逸脱者のアイコンから、本格的な世界的文化現象、ラテンアメリカ音楽の先駆者へと昇華させた。それ以来、アルカは 2 つのラテン・グラミー賞と 1 つのグラミー賞にノミネートされている。ジャン・ポール・ゴルチエ、ロエベ、アクネ・ストゥディオズ、ディオール、プロエンザ・スクーラー、リーボック、ビレド、バイレード、ボッテガ・ヴェネタ、ミュグレーなどのレーベルと協働し、作曲も手がけている。レディー・ガガ、ビバリー・グレン・コープランド、ローリー・アンダーソンの楽曲のリミックスを手がけ、バルセロナとパリでビヨンセのルネッサンス・ワールド・ツアー、バルセロナでマドンナのライブ、そして最近はニューヨークで LadyLand フェスに登場した。2023 年秋、パーク・アヴェニュー・アーモリーでのレジデンシー公演「Mutant;Destrudo」、2024 年 3 月、Bourse de Commerce（パリ）におけるパフォーマンス作品「The Light Comes in the Name of the Voice」に続き、故郷ベネズエラのカラカスで初のヘッドライン・ショーを行い、その後ベネズエラの友人や DJ たちとボイラー・ルームのライブ・セットで注目を集めた。2019 年、アルカはブロンズを探求し始め、革新的な AI ソフトウェアを使用し、フィリップ・パレーノとニコラ・ベッカーと共同作業して MoMA の新ロビーのためのオートポイエティック（自己創出）な作品を制作した。

© Hendrik Schneider

アニルバン・バンディオパダヤイ ｜ Anirban Bandyopadhyay（1975 年、インド）

アニルバン・バンディオパダヤイは、つくば市にある国立研究開発法人物質・材料研究機構（NIMS）の主幹研究員。2004-5 年、コルカタのインド科学育成協会（IACS）で超分子エレクトロニクスとマルチレベルスイッチングの研究に従事し、博士号を取得。バンディオパダヤイは、画期的な共鳴鎖ベースの完全ヒト脳モデルを開発し、共鳴鎖のギャップを埋めることが鍵となる代替ヒト脳地図を開発した。彼のグループは、未来型ロボットのために、自ら学習し、プログラムし、問題を解決する有機脳ゼリーや、自ら複雑なコードを書くソフトウェア･シミュレーターを設計･合成してきた。著書に『Nanobrain: The Making of an Artificial Brain from a Time Crystal』（2020 年）。



（Credits not required）

ニコラ・ベッカー ｜ Nicolas Becker（1970 年、フランス）

ニコラ・ベッカーは映画音響の世界で、サウンドエンジニア、デザイナー、フォーリーアーティスト、作曲家として多方面で活躍している。アルフォンソ・キュアロン監督の『ゼロ・グラビティ』（2013 年）、アレックス・ガーランド監督の『エクス・マキナ』（2014 年）、ドゥニ・ヴィルヌーヴ監督の『メッセージ』（2016 年）、アレハンドロ・イニャリトゥ監督の『バルド、偽りの記録と一握りの真実』（2022 年）などの受賞作を手がけ、世界の映画界で高い人気を誇っている。ベッカーはダリウス・マーダー監督の『サウンド・オブ・メタル ～聞こえるということ～』（2019）でアカデミー賞音響賞を受賞した。彼は音の熱心なコレクターであり、作品制作のための豊富な貯蔵庫ともなる膨大な音の素材ライブラリを蓄積している。サウンドデザインへのアプローチにおいて、ベッカーはユニークな音の構造を作り上げ、その手法は現代アートの領域と密接な接点を持つものである。

（Credits not required）

イアン・チェン | Ian Cheng（1983 年、アメリカ）

イアン・チェンはニューヨークを拠点に活動するアーティスト。2012 年以来、チェンは刻々と変化する環境に対処する主体の能力を探求する一連のシミュレーションを制作してきた。これらの作品は「Emissaries」3 部作において余すところなく展開された。この三部作では語り部となる一人のキャラクターが登場するが、物語を進行させるためにこのキャラクターが与えられた動機は、シュミレーションのオープンエンディングな混沌と衝突するのである。また、彼の作品「BOB（Bag of Beliefs)」は、複数の展覧会をわたって人格、身体、そしてその生涯が進化していく AI 主導のクリーチャーで、チェンはこれを 「神経系を持つアート」と呼んでいる。最近では、人間と AI の共生を模索するリアルタイムアニメ『Life After BOB』を監督した。チェンは著書『Emissary's Guide To Worlding』で、生きた自律世界を創造する心理学とテクニックを探求している。チェンは、子供や家族向けに動物レベルの AI エージェントを開発する新会社 Opponent の創設者でもある。

© Ian Cheng, Photo by Andrea Rosetti

ジェームズ・チンランド | James Chinlund（1971 年、アメリカ）

ジェームズ・チンランドは、長編映画やテレビの世界観構築で知られる、アメリカのプロダクション・デザイナーで、数々の賞を受賞してきた。『ザ・バットマン』(2022 年)、『ライオン・キング』(2019 年)、『猿の惑星：新世紀』(2014 年)、『レクイエム・フォー・ドリーム』(2000 年）などで知られる。また、ルイ・ヴィトン、シャネル、ナイキ、アップルなどのビデオ、印刷広告、ファッションショーのデザインも手がけている。現在、『ザ・バットマン 2』やベニー・サフディ、フィリップ・パレーノ監督の長編映画を製作中。

© James Chinlund

メアリー・ヘレナ・クラーク ｜ Mary Helena Clark（1983 年、アメリカ）

メアリー・ヘレナ・クラークは、映像、サウンド、彫刻、写真を駆使して活動するアーティスト。実験映画を背景に持つ彼女の作品は、モンタージュとエッセイ形式を頻繁に組み合わせ、人間と動物、人工物と自然、センスとナンセンスの間で作り上げられた差異に疑問を投げかける。近年の展覧会に、「Conveyor」Bridget Donahue（ニューヨーク、2023 年）、「Neighboring Animals」Cushion Works（サンフランシスコ、2023 年）、「A Green Shade」MIT List Visual Arts Center（ケンブリッジ、2019 年）、「Unboxing: Doublespeak」Museum of Contemporary Art Detroit（デトロイト、2019 年）、「A Casual Pincer」AWHRHWAR（ロサンゼルス、2019 年、「Audible Bacillus」Ezra and Cecile Zilkha Gallery（ウェズリアン大学、ミドルタウン、2019 年）など。彼女の作品は、サンダンス映画祭、ロッテルダム国際映画祭、ニューヨーク映画祭、トロント国際映画祭、香港国際映画祭、シネマ・ドゥ・リール、2017 年ホイットニー・ビエンナーレなどで上映されている。

Copyright Mary Helena Clark, Courtesy of the artist and Bridget Donahue, NYC, Photo by Gregory Carideo

マティ・ディオップ | Mati Diop（1982 年、フランス）

2000 年代初頭以来、ディオップは名高く、進化的な作品群を築いた。それらの作品は数々の国際映画祭で紹介されている。カンヌ国際映画祭でグランプリを受賞した初の長編映画『アトランティック』（2019 年）に続き、ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した『ダホメ』（2024 年）で、彼女は国際的に重要な映画作家として、またアフリカ映画とディアスポラ映画の新しい波としての地位も確立している。ディオップのノマド的かつ物語的、政治的な映画作りは、ジャンルやフォーマットの境界を超え、彼女の二重のアイデンティティと、主張されたクレオールさ（植民地主義によってもたされた混交）を反映している。ミュージシャンの父ワシス・ディオップと写真家兼アートバイヤーの母のもと、セネガル系フランス人の家庭に育つ。カルト映画『トゥキ･ブゥキ/ハイエナの旅』(1973) の監督・脚本を務めたジブリル・ディオップ・マンベティの姪である。ディオップ映画の形式主義は、ビジュアル・アート、特にビデオとサウンドに対する作家の好奇心に由来する。2006 年、パレ・ド・トーキョーの創作ラボ「パヴィヨン」に参加。ル・フレノワに短期間在籍し、そこでクレール・ドゥニと出会って『35 杯のラムショット』（2008）で主演女優を任された後、監督になりたいという願望を確信した。これが『アトランティックス』（2009 年、ロッテルダム国際映画祭タイガー・アワード）、『千の太陽』（2013 年、FID マルセイユグランプリ）、『アトランティック』と、ダカールを舞台に 10 年かけて展開される三章からなる叙事詩の始まりとなった。この三作は、セネガルにおける大衆的な若者を中心としたコミットメント映画という政治的な選択を宣言するマニフェストを形成している。監督にとって映画は、失われたイメージを取り戻し、植民地主義から生まれた表象に疑問を投げかけ、アフリカのイマジネーションを捨てたヒーローを創り出すためのツールである。ダカールに制作会社ファンタ・シーを設立し、アフリカ大陸への芸術的コミットメントを続けている。

Atlantique © Les Films du Bal

フリーダ・エスコベド | Frida Escobedo（1979 年、メキシコ）

フリーダ・エスコベドは 2006 年にメキシコシティに自身の名を冠した建築事務所を設立。母国で一連のコンペ受賞プロジェクトを強みに築かれたこの事務所は、2018 年、ロンドンのケンジントン・ガーデンズで毎年開催されるサーペンタイン・パビリオンの設計という名誉ある指名を受けて以来、その評判が世界的な広がりを見せている。建築物や実験的な保存プロジェクトから、一時的なインスタレーションや公共彫刻、オブジェ、出版物、展覧会のデザインに至るまで、エスコベドは多岐にわたるスケールや表現手段で活動し、伝統的な分野の境界線を越えている。2021 年、ニューヨークのメトロポリタン美術館の新しい近現代アートウィングを設計する建築家に任命され、同美術館の建物を設計した最年少かつ初の女性建築家となった。また、エスコベドの事務所は、ポンピドゥー・センター2030 年の改修を率いるモロークスノキ建築設計のアソシエイト・デザイナーに選ばれている。エスコベドは建築家として数々の栄誉に浴しており、実務に加え、アメリカ名門大学の大学院で教鞭も執っている。

©Rafael Gamo

FABRYX | FABRYX（2023 年設立、アメリカ/フランス）

FABRYX は、アマゾンのシャーマンが植物と対話するように、鉱物と対話することを使命とする分散型鉱物芸術ギルドである。そのメンバーには、アーティスト、エンジニア、デザイナー、キュレーター、ミュージシャン、科学者、弁護士、そしてさまざまな伝統知の直系継承者が含まれる。その製品は、古代の建築と現代のコンピューティングという巨石文化的かつ微細的な芸術の知識を組み合わせ、創造的な洞察力を刺激することで癒しを与える。ギルド・ロッジは、フランス・パリから西へ 1 時間の田舎、レ・ロゾーの元銅精錬所にある。そこでは、メンバーたちがレジデンシーやリトリート・プログラムに参加し、鉱物の領域と視点を融合させるための斬新なプロトコルである「ミネラル・ディエタ」を開発している。このプログラムは、AI を使ったバイオフィードバック*の特注フローティング・タンク**「アルゴ」での長時間のセッションによって活性化される、儀式化されたデトックスと再石灰化で構成されている。

「ミネラル・ディエタ」で生成されたデータは、ユーザーが変性意識状態や夢体験に取り組むことを可能にする消費者向け製品に力を与える基礎 AI モデルを訓練するために使用される。ギルドの成果の大半はオープンソースであり、フランスで 3 歳から 12 歳の子どもたちが通う実験的な学校をサポートしている。また、そのプロトコルや製品から派生した展覧会も企画している。

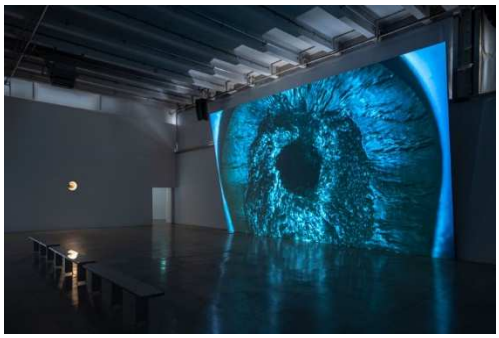
*バイオフィードバック：生体自己制御ともいわれる。心拍のような人間の制御できない現象を、画像や音など人間が感覚できる形に変換し、対象者の意識の下に置かせ、フィードバックする技術とのこと。

**フローティング・タンク：外部の音や光が遮られ、温水が浅く張られ、人が横たわれて浮かぶような装置のこと。感覚遮断タンクともいわれる。

（Credits not required）

シプリアン・ガイヤール | Cyprien Gaillard（1980 年、フランス）

ベルリンとパリを拠点に活動するアーティスト。主な個展に、Palais de Tokyo & Lafayette Anticipations（パリ、2022 年）、Fondation LUMA（アルル、2022 年）、森美術館（東京、2021 年）、TANK Shanghai（上海、2019 年）、Accelerator Konsthall（ストックホルム、2019 年）、ティンゲリー美術館（バーゼル、2019 年）、ノルトライン=ヴェストファーレン州立美術館 K20（デュッセルドルフ、2016 年）、 ユリア・ストシェック・コレクション（デュッセルドルフ、2015 年）、MoMA PS1（ニューヨーク、2013 年）、ハマー美術館（ロサンゼルス、2013 年）、ニコラ・トラサルディ財団（ミラノ、2012 年）、シンケル・パヴィヨン（ベルリン、2012 年）、ポンピドゥー・センター（パリ、2011 年）、クンストヴェルケ現代美術センター（ベルリン、2011 年）、クンストハーレ・バーゼル（バーゼル、2010 年）。主なグループ展に、バイエラー財団（スイス、2024 年）、カルミニャック財団（ポルケロール、2022 年）、ヘルシンキ現代美術館（ヘルシンキ、2022 年）、パレ・ド・トーキョー（パリ、2021 年）、ユリア・ストシェック・コレクション（ベルリン、2021 年）、GAMeC（ベルガモ、2021 年）、ハンブルガー・バーンホフ（ベルリン、2020 年）など、 第 58 回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2019 年）、フィンセント・ファン・ゴッホ財団（アルル、2019 年）、クリーブランド・トリエンナーレ（2018 年）、グロピウス・バウ（ベルリン、2018 年）、ルイ・ヴィトン財団（パリ、2018 年）、ARoS トリエンナーレ（オーフス、2017 年）、紅磚美術館（北京、2017 年）、ハーシュホーン美術館・彫刻庭園（ワシントン D. C.、2017）、ヘイワード・ギャラリー（ロンドン、2016 年）、第 13 回リヨン・ビエンナーレ（2015 年）、第 54 回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2011 年）、光州ビエンナーレ（2010 年）、第 5 回ベルリン・ビエンナーレ（2008 年）。



HUMPTY. Installation view, Palais de Tokyo, Paris, October 20, 2022-January 8, 2023. Photo: Timo Ohler.

ニコラ・ジェスキエール | Nicolas Ghesquière（1971 年、フランス）

ニコラ・ジェスキエールは、世界で最も有名で革新的なファッションデザイナーの一人である。彼のスタイルは、未来的な美学と建築的なフォルム、そして伝統的なノウハウへの深い敬意を融合させたものと評されることが多い。20 歳のとき、クリエイティブ・アシスタントとしてジャン・ポール・ゴルチエに入社。1995 年、バレンシアガに入社し、2 年後でクリエイティブ・ディレクターに就任。2001 年、CFDA の「インターナショナル・デザイナー・オブ・ザ・イヤー」を受賞した。2006 年、タイム誌の「世界で最も影響力のある 100 人」に選ばれ、翌年にはフランス政府から芸術文化勲章シュヴァリエを授与された。2013 年以来、ルイ・ヴィトンでウィメンズ･コレクションのアーティスティック･ディレクターを務め、ウォール・ストリート・ジャーナル紙の「ファッション・イノベーター・オブ・ザ・イヤー」、ブリティッシュ・ファッション・アワードの「インターナショナル・デザイナー・オブ・ザ・イヤー」（2014 年）、「インスタイル・デザイナー・オブ･ザ･イヤー」（2015 年）など、業界から複数の賞やノミネートを受賞している。2016 年には世に名だたるメット・ガラの名誉会長に任命され、2015 年からは LVMH プライズの審査員も務めている。デザイナーとしてのキャリアの中で、ニコラ・ジェスキエールは、山本寛斎、フォルナセッティ、孫一鈿、フィリップ・パレーノなど、様々な分野のアーティストやクリエーターとコラボレーションを行い、世界各地の重要なランドマークとなる建築物のなかでコレクションを発表してきました。ルイ・ヴィトンの 2024 年秋冬ウィメンズ・コレクションは、ジェスキエールの入社 10 周年を記念したもの。2014 年、ルーヴル美術館の中庭で行われた、彼のルイ・ヴィトンでの初めてのショーには、4,000 人のゲストが来場した。

Copyright: LOUIS VUITTON MALLETIER GIOVANNI GIANNONI

リアム・ギリック ｜ Liam Gillick（1964 年、イギリス）

1964 年アイスバーリー生まれ、現在、ニューヨークにて制作、活動。
ギリックの作品は、グローバリゼーションやネオリベラルの合意性を枠組みとした場合の、抽象化と建築の視点におけるモダニズムの遺産の機能不全な側面を明るみにする。そして、一つの形式としての展覧会についての構造的な再考というものに敷衍していく。第 53 回ヴェネツィア・ビエンナーレにドイツ館代表作家として参加した他、第 10 回ドクメンタ、ベルリン・ビエンナーレ、イスタンブール・ビエンナーレなど重要な国際展に多数参加。シカゴ現代美術館、ニューヨーク近代美術館、テートモダンなどで個展を開催。ポンピドゥ・センター、ニューヨーク近代美術館、グッゲンハイム美術館など、著名美術館でのパブリックコレクションも多数。2023 年、ペルガモン美術館（ベルリン）にて個展「Filtered Time」を開催、2016 年には「岡山芸術交流 2016：開発」（岡山）にて芸術監督をつとめた。

© 2016 Okayama Art Summit Executive Committee, Collection of Ishikawa Foundation, Okayama, Courtesy of the artist and TARO NASU, Photo by Yasushi Ichikawa

ホリー・ハーンダン & マシュー・ドライハースト
| Holly Herndon & Mathew Dryhurst（アメリカ、1980 年／イギリス、1984 年）

ホリー・ハーンダンとマシュー・ドライハーストは、機械学習、ソフトウェア、音楽の分野で先駆的な活動を行うアーティストとして広く知られている。彼らは自らのテクノロジーや他者のテクノロジーと共存するシステムを開発し、デジタルアイデンティティと声の所有権および拡張に重点を置くことが多い。これらの技術的プロトコルは、メディアを超えて広範な作品を実現するだけでなく、それ自体が一種の芸術作品として提案されている。2024 年には、サーペンタイン・ギャラリーで個展「The Call」を開催し、ホイットニー・ビエンナーレにも参加した。彼らはまた、パブリックドメイン AI モデルとデータインフラを構築する組織「Spawning」を共同設立した。彼らの批評家から高く評価されている音楽作品は、4AD および RVNG Intl. からリリースされている。ホリー・ハーンダンはスタンフォード大学 CCRMA でコンピュータ音楽の博士号を取得しており、マシュー・ドライハーストはほぼ独学で学んできた。彼らは NYU、ヨーロッパ大学院、バーググルーエン・インスティテュートのアンティキティラ・プログラムで教員職を務めてきたほか、2022 年にはデジタルアートのための Ars Electronica STARTS 賞を受賞し、2024 年にはオーストリア初のデジタル人権賞を受賞している。

© Holly Herndon and Mathew Dryhurst, Photo by Leon Chew

Isolarii | Isolarii（2020 年設立、イギリス）

Isolarii はニューヨークとロンドンを拠点とするメディア企業である。設立以来、文学における従来の常識ーその美学や流通、目的などーを打破する試みにおいて評価されている。Isolarii の書籍は、今日最も急進的な組織や人物の図式を提示している。出版物の著者に残雪やスコラスティック・ムカソンガ、ロバート・クーヴァー、アート・スピーゲルマン、エドゥアール・グリッサンなどがいる。2020 年後半以降、同社は環境イニシアティブ（『Salmon: a Red Herring』）の触媒となったり、ヨーロッパ全土でフェミニスト抗議のシンボルとなったもの（『F-Letter』）を配布したり、キーウから国際的に同時配給されたルポルタージュ（『War Diary』）を制作した。岡山芸術交流 2025 では、Isolarii が日本文化の象徴的な作品を流通させる。

© ISOLARII / Luke Libera Moore

アレクサンドル・コンジ | Alexandre Khondji（1993 年、フランス）

アレクサンドル・コンジは、フランス・パリを拠点に活動するコンセプチュアル・アーティスト。ニューヨークのバード大学で学士号、ロンドンのロイヤル・カレッジ・オブ・アートで修士号を取得。主な展覧会に、「Air de Repos（Breathwork）」CAPC ボルドー現代美術館（ボルドー、2024 年）、Maureen Paley（ロンドン、2024 年）、Shivers Only（パリ、2023 年）、LUMA（アルル、2021 年）など。なお、Sweetwater（ベルリン、2025 年）で個展が予定されている。

Alexandre Khondji, *Dams*, 2024. Aluminum, EPDM rubber, screws. 550 x 250 x 8 cm. Courtesy: Maureen Paley, Studio M, London. Copyright: Steven James.

ミレ・リー | Mire Lee（1988 年、韓国）

ミレ・リーは、みすぼらしく、滑稽で、不安定に見えるキネティック彫刻インスタレーションを制作することで知られるアーティストである。リーの作品は、自分らしさ、社会的受容性、清潔さといった概念に挑戦しており、オーガズミック、逸脱的かつキネティックなテクノロジーを前に、美学や欲望に関する社会の慣習を消し去っている。最近の個展に「Black Sun」New Museum（ニューヨーク、2023 年）、「Carriers」Tina Kim Gallery（ニューヨーク、2022 年）、「Look, I'm a fountain of filth raving mad with love」ZOLLAMT MMK（フランクフルト、2022 年）、「Carriers」Art Sonje Center（ソウル、2020 年）など。また、2024 年 10 月にテート・モダンで幕を開ける「Turbine Hall Commission 2024」アーティストにも選出されている。

Andrea, Ophelia, at the endless house, one moving image through the window of the studio with an open ceiling, one kinetic sculpture, mixed media, 2018. Photo © GJ van ROOIJ

ルクレシア・マルテル | Lucrecia Martel（1966 年、アルゼンチン）

アルゼンチン・サルタ生まれのルクレシア・マルテルは、2001 年に長編デビュー作『沼地という名の町』(LA CIÉNAGA) を初監督し、2004 年に『聖なる少女』(LA NIÑA SANTA)、2008 年に『頭のない女』(LA MUJER SIN CABEZA) を発表。ラテンアメリカにおける植民地主義と人種差別を探求した長編第 4 作『ZAMA』(2017) は、ヴェネツィア国際映画祭でプレミア上映された。彼女の作品の回顧上映は、ハーバード大、MoMA、リンカーン・センター、ケンブリッジ大、ロンドンのテート・ミュージアムなど、多くの芸術・文化施設で実施されている。最新作には、インスタレーション作品「THE PASSAGE」EYE Filmmuseum（アムステルダム、2021 年)、サルタで撮影された、フリエタ・ラソ主演による、ドキュメンタリー『TERMINAL NORTE』(2021 年)、ヴェネツィア国際映画祭でプレミア上映された短編『CAMARERA DE PISO』(2022 年) などがある。2023 年、アルゼンチンのブエノスアイレス大学、サルタ国立大学、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学より名誉博士号を授与される。

Zama (Daniel Giménez Cacho) stands by the shore, waiting for a ship to arrive. From left to right.
© Rei Cine SRL, Bananeira Filmes Ltda, El Deseo DA SLU, Patagonik Film Group SA

中田英寿 | Hidetoshi Nakata（1977 年、日本）

1977 年山梨県生まれ、元サッカー日本代表。引退後は、全国 47 都道府県を旅しながら、農家や酒蔵、職人など日本文化を国内外に発信し、伝統産業を発展させる「にほんものプロジェクト」の活動を続けている。2009 年 1 月、TAKE ACTION FOUNDATION を設立し、さまざまな社会問題に取り組む。2014 年、ジョン・F・ケネディの妹ユニス・ケネディ・シュライバーが知的・発達障害者の自立と社会参加を促進するために始めたスペシャルオリンピックスのアンバサダーに就任。2017 年、スポーツを通じて社会問題に取り組む社会貢献活動を支援する「HEROs プロジェクト」のアンバサダーに就任。日本の伝統産業に関連する分野でブロックチェーンやアプリなどの最新技術を活用した事業を展開するため、2015 年に日本クラフト酒株式会社を設立。2020 年 4 月より 1 年間、立教大学客員教授。2020 年 10 月、日本で唯一の工芸専門の国立博物館である国立工芸館の名誉館長に就任。事業運営のアドバイス、各分野のネットワーク構築、情報発信の強化などを担う。

© にほんもの/ © NIHONMONO

ハンス・ウルリッヒ・オブリスト | Hans Ulrich Obrist（1968 年、スイス）

ロンドンのサーペンタインのアーティスティック・ディレクター、LUMA アルルのシニア・アドバイザーを務める。1991 年の初展示「ワールド・スープ（キッチン・ショー）」以来、350 以上の展覧会をキュレーション。なかでも代表的なものに、「Do It」シリーズ（1993 年~）、「Take Me（I'm Yours）」（ロンドン、1995 年；パリ、2015 年；ニューヨーク、2016 年；ミラノ、2017 年）、第 14 回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展のスイス館（2014 年）などがある。オブリストはまた、「Cities on the Move」シリーズ（1996 年-2000 年）、「Laboratorium」（1999 年）、でのオペラグループ展「Il Tempo del Postino」（マンチェスター、2007 年；バーゼル、2009 年）、「The 11, 12, 13, 14, 15 Rooms」シリーズ（2011-2015）の共同キュレーションも手がけた。最近の主な展覧会に、ミラノ・トリエンナーレでのエンツォ・マリ展（2020 年）、ポンピドゥー・センター・メスでの「WORLDBUILDING」（2023 年）、ユリア・シュトーシェック・コレクション展（デュッセルドルフ、2022 年）などがある。2011 年には CCS バード賞キュレーター部門、2015 年には国際フォルクヴァング賞を受賞。最近では、アメリカ鑑定家協会より 2018 年度優秀芸術賞を受賞した。オブリストは、学術機関や美術機関で国際的に講義を行い、複数の雑誌やジャーナルの寄稿編集者でもある。近著に『Ways of Curating』（2015 年、邦訳：『キュレーションの方法：オブリストは語る』）、『The Extreme Self: Age of You』（2021 年）、『140 Artists' Ideas for Planet Earth』（2021 年）、『Edouard Glissant：Archipelago』（2021 年）、『James Lovelock：Ever Gaia』（2023 年）、『Remember to Dream!』（2023 年）、『Une vie in progress』（2023 年）など。

Hans-Ulrich Obrist Archive - Chapter 3 Agnes Varda, image by Arthur Fouray

プレシャス・オコヨモン | Precious Okoyomon（1993 年、イギリス）

プレシャス・オコヨモンはナイジェリア系アメリカ人の詩人、アーティスト。初のチャップブック『Ajebota』は 2021 年に Bottlecap Press から出版された。オコヨモンの作品は、自然界、移民と人種差別の歴史、日常生活の純粋な喜びについて考察している。LUMA Westbau（チューリヒ、2018 年）、フランクフルト現代美術館（フランクフルト、2020 年）、パフォーマンス・スペース・ニューヨーク（ニューヨーク、2021 年）、アスペン美術館（アスペン美術館、2021 年）で個展を開催。第 59 回ヴェネツィア・ビエンナーレ、第 58 回ベオグラード・ビエンナーレ、フランス・パリのパレ・ド・トーキョー、アルルの LUMA Arles でのグループ展にも参加。主なパフォーマンスは、ロンドンのサーペンタイン（2019 年）とインスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート（2019 年）からコミッションを受けている。2020 年に LUMA アルルでアーティスト・イン・レジデンスを行い、2021 年にはフリーズ・アートフェア・アーティスト賞、2021 年にはシャネル・ネクスト・アート賞を受賞している。オコヨモンの作品は現在、2024 年ヴェネツィア・ビエンナーレのナイジェリア館を代表するグループ展「Nigeria Imaginary」や、バイエラー財団の夏の展覧会「Cloud Chronicles」で展示されている。

Touching My Lil Tail Till the Sun Notices Me, 2022. Courtesy of the artist. Supported by rossogranada.

OVERCOAT, COME TOGETHER, 2022. Courtesy of oomura seisakusho 3 Inc.

Special thanks to The OR Foundation, Akiko Ichikawa.

© 2022 Okayama Art Summit Executive committee, Photo by Yasushi Ichikawa.

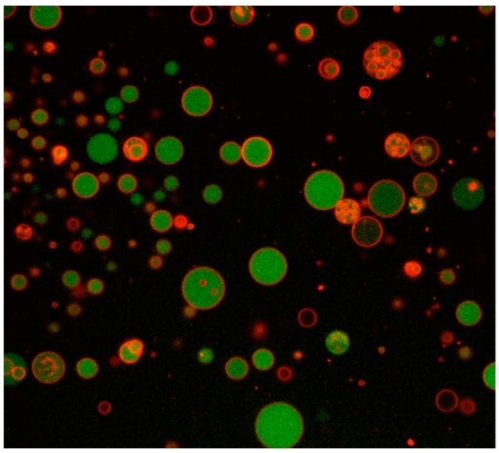
レイチェル・ローズ | Rachel Rose（1986 年、アメリカ）

レイチェル・ローズはニューヨーク在住。彼女の作品は、風景と私たちの関係の変化が、どのように物語や信念体系を形作ってきたかを探求している。ローズの映画は、映画革新の長い歴史から学び、またそれに貢献するものである。低温物理学、アメリカ独立戦争、宇宙飛行士の宇宙遊泳など、どのような探究であれ、彼女は、崇高さと日常が曖昧になるような場所や歴史に私たちの注意を向ける。彼女はこれを絵画、彫刻、ドローイングに反映させ、互いに物質的に反響させながら、目先の時間から百万年単位の膨大な時の流れまで、異なる時間層をつなぎ合わせる試みを行なっている。個展に、 GL STRAND（2023 年）、SITE Santa Fe （2023 年）、 Gladstone Gallery（2023 年）、CC Strombeek（2022 年）、Pond Society（上海、2020 年）、Lafayette Anticipations（2020 年）、Fridericianum（2019 年）、LUMA Foundation（2019 年）、Philadelphia Museum of Art（2018 年）、 Fondazione Sandretto Re Rebaudengo（2018 年）、Kunsthaus Bregenz（2017 年）、 Museu Serralves, Porto（2016 年）、The Aspen Art Museum, Aspen（2016 年）、The Whitney Museum of American Art（2015 年）、Serpentine Gallery（2015 年）、Castello di Rivoli（2015 年）など。

Rachel Rose, still from Everything and More, 2015.
Courtesy of the artist, Gladstone Gallery, New York, Brussels, and Seoul, and Pilar Corrias Gallery, London.

ディミタール・サセロフ | Dimitar Sasselov（1961 年、ブルガリア）

ディミタール・サセロフはハーバード大学で星と惑星について研究を行う天文学教授であり、ハーバード大学「生命起源イニシアチブ」プログラムの創設ディレクターでもある。彼の研究は、初期宇宙における宇宙マイクロ波背景の出現から、地球における生命の起源に関する光化学の実験室実験まで、光と物質の相互作用の様式を探求している。20 年以上前、サセロフが率いるチームは、後に NASA のケプラーと TESS ミッションの共同研究員として、地球のような惑星を見つけるための新しい技術を駆使して、他の恒星を周回する惑星をいくつか発見した。彼の著書 『The Life of Super-Earths』(Basic Books、2012 年）は、他の惑星の生命の新たな探索について述べている。 1988 年、ディミタール・サセロフはソフィア大学（ブルガリア）で物理学の博士号を取得し、1990 年にはトロント大学で天文学の博士号を取得した。1999 年、アルフレッド・P・スローン・フェローとなる。数々の賞ーNASA 業績賞 2 つ、名誉博士号（ソフィア大学)、オックスフォード大学アスター・レクチャーシップなどーを授与され、DLD や TED、ダボス会議などで講演を行っている。物理科学と生命科学を橋渡しする学際的な研究活動であるハーバード大学「生命起源イニシアチブ」プログラムの創設ディレクターであると同時に、サイモンズ財団「生命起源共同研究計画」の創設共同ディレクターでもあり、2023 年には国際的な「Origins Federation」の創設に貢献し、現在はその理事長を務めている。ハーバード大学ラドクリフ高等研究所のシニア・サイエンス・アドバイザー、世界経済フォーラムの宇宙安全保障に関するグローバル・アジェンダ・カウンシルのメンバーをも歴任。



(Credits not required)

ティノ・セーガル | Tino Sehgal（1976 年、イギリス）

同世代で最も重要なアーティストの一人として広く評価されている、セーガルに対する批評家たちの称賛は、「構築された状況」という形をとる彼の先鋭的な芸術的実践に由来する。その儚い美しさは、刹那的な出会いの特異性にあり、プレイヤーはしばしば作品の構成に積極的に参加することで、来場者を魅了する。フィリップ・パレーノとは長い共同制作の歴史がある。ドイツのエッセンにあるフォルクヴァング芸術大学でベルリンの政治経済とダンスを学ぶ。彼の作品は国際的に数多くの個展やグループ展で展示されており、特にバイエラー財団（バーゼル、2024 年）、Desert X AlUla（サウジアラビア、2024 年）、Centro Botín（サンタンデール、2023 年）、Remai Modern（サスカトゥーン、2022 年）、小田原芸術文化振興財団（小田原、2019 年）、Officine Grandi Riparazioni（トリノ、2018 年）； V-A-C 財団（モスクワ、2017 年）、バイエラー財団（バーゼル、2017 年）、Jemaa el-Fna（マラケシュ、2016 年）、パレ・ド・トーキョー（パリ、2016 年）、ステデライク美術館（アムステルダム、2015 年）、マルティン・グロピウス・バウ（ベルリン、2015 年）、ピナコテカ・CCBB（サンパウロ・リオデジャネイロ、2014 年）、ウレンス現代美術センター（北京、2013 年）、テート・モダン（ロンドン、2012 年）、ソロモン・R・グッゲンハイム美術館（ニューヨーク、2010 年）、クンストハウス・ブレゲンツ（ブレゲンツ、2006 年）など。

島袋道浩 | Shimabuku（1969 年、日本）

島袋は、沖縄県那覇市に在住し、国際的に活躍する日本人コンセプチュアル・アーティストである。1990 年代初頭より、国内外を問わず様々な場所を旅し、また彼の作品は、サイトスペシフィックで、その場所で暮らす人々の場所、生活、文化に関わっている。新たなコミュニケーション形態に関連したパフォーマンス、映像、彫刻、インスタレーション作品などで知られる。彼の作品は時に生き物と人間の関係性にも及ぶ。詩情とユーモアに溢れ、隠喩的な方法で観る者を挑発する作風は、国際的に高い評価を得ている。主要な国際展に、第 57 回ヴェネツィア・ビエンナーレ（2017 年）、第 14 回リヨン・ビエンナーレ（2017 年）、第 12 回ハバナ・ビエンナーレ（2015 年）、第 9 回台北ビエンナーレ（2014 年）、第 11 回シャルジャ・ビエンナーレ（2013 年）、第 27 回サンパウロ・ビエンナーレ（2006 年）、リバプール・ビエンナーレ（2006 年）、第 11 回シドニー・ビエンナーレ（1998 年）など。最近の主な個展に、セントロ・ボティン（サンタンデール、2024 年）、ムゼイオン：ボルツァーノ現代美術館（ボルツァーノ、2023 年）、ヴィールズ現代美術センター（ブリュッセル、2022 年）、モナコ新国立美術館（モナコ、2021 年）、Crédac-イヴリー現代美術センター（イヴリー＝シュル＝セーヌ、2018 年）、クンストハレ・ベルン（ベルン、2014 年）、Icon Gallery（バーミンガム、2013 年）など。島袋は岡山芸術交流の「アーティスティック・トランスレーター」を務める。

飛ぶ私/Flying Me, 2006, Courtesy of the artist

サウンドウォーク・コレクティヴ | Soundwalk Collective（2001 年創設、フランス）

サウンドウォーク・コレクティヴは、創設者・アーティストのステファン・クラスニアンスキーとプロデューサーのシモーネ・メルリによるコンテンポラリー・ソニック・アーツ・プラットフォーム。アーティストやミュージシャンを交えながら、コンセプチュアルで文学的または芸術的なテーマを検証するために、その場所や状況に特化したサウンド・プロジェクトを展開している。サウンドウォーク・コレクティヴは、ミュージシャンのパティ・スミス、映画監督のジャン＝リュック・ゴダール、写真家のナン・ゴールディン、振付師のサシャ・ヴァルツ、女優兼歌手のシャルロット・ゲンズブールらと長期的なコラボレーションを展開。彼らの活動は、アートインスタレーション、ダンス、音楽、映画などのメディアを横断して、音の物語的な可能性に関与している。最新のオリジナル音楽担当作品『美と殺戮のすべて』（監督：ローラ・ポイトラス）は、2022 年ヴェネツィア国際映画祭で金獅子賞を受賞。2024 年には、アテネのオナシス財団、ニューヨークの BAM、メデジンの MAMM 現代美術館で、パティ・スミスとの新作展示とパフォーマンス「Correspondences」を発表した。サウンドウォーク・コレクティヴは、BAM、CCB リスボン、ポンピドゥー・センター、CTM フェスティバル、ドクメンタ、KW インスティテュート・オブ・コンテンポラリー・アート、ルーヴル・アブダビ、マニフェスタ、ザハ・ハディドによるモービル・アート・パビリオン、ニュー・ミュージアム、リートハウス、TPMM トビリシ、フォルクスビューネ・ベルリンなど、数多くの芸術・音楽施設やイベントでパフォーマンスや展示を行っている。

Photo by Yohan López. Courtesy: Medellín Museum of Modern Art

ラムダン・トゥアミ | Ramdane Touhami（1974 年、フランス）

ラムダン・トゥアミは、パリを拠点に活動するモロッコ系フランス人デザイナーで、博識な起業家でもある。キャリアの初期には、フランス初のスケートボードウェアラインを立ち上げ、ギャラリー兼コンセプトストア「L'Épicerie」をオープン。東京の And.A やロンドンの Liberty などのファッションブランドやコレクションを指揮し、コスメティック・コンセプトストア「Parfumerie Générale」を立ち上げた。2007 年、世界最古のキャンドルメーカーであるフランスのシール・トゥルドン社の改革を手がけ、世界的な成功を収めた。2014 年、19 世紀創業の美容ブランド「オフィシーヌ・ユニヴェルセル・ビュリー」を復刻オープンし、LVMH による買収を成し遂げた。現在は、ラグジュアリーブランドやライフスタイルブランドを扱うエージェンシー「Art Recherche et Industrie」を中心に活動している。このスタジオでは、デザイナー、ディレクター、木工職人、建築家、植字工、印刷工を雇い、すべてのプロジェクトを社内制作によって実現させている。また、クリエイティブ・ディレクターのレオナール・ヴェルネとともに出版社も経営している。彼の山への情熱は、2023 年にスイス・アルプスで受賞歴のあるドライ・ベルゲ・ホテルを立ち上げることにつながった。2024 年には、山に関連する以下の 5 つのプロジェクトを公表した：パリのパレ・ロワイヤル庭園にあるアウトドア・ブティック「A Young Hiker」、雑誌「Useless Fighters」、ドライ・ベルゲ・ホテルの姉妹カフェとしての「Drei Berge Utopia」、2 つのブランド：「Drei Berge Mountain Shoes」、そして彼の名を冠したジュエリー・コレクション。また、「Pseudo Radio」というオーディオ番組制作スタジオを運営している。24 時間 365 日稼働のライブオンラインラジオ「Music for Hikers」もプロデュースしている。

© Younès Klouche

アンガラッド・ウィリアムズ | Angharad Williams（1986 年、ウェールズ）

アンガラッド・ウィリアムズ（ウェールズ・モーン島生まれ）の作品は、私たちの生活や環境を支配する力学についての内省と批判的な考察を促す。ペインティング、ドローイング、ライティング、彫刻、写真、インスタレーション、映像、パフォーマンスなど、彼女の多面的なアート活動は、内に秘められた、われわれの最も潜在的な欲望や恐怖を投影するスクリーンやフィルターとして機能する形態に目を向けている。これらの時に曖昧な表現は、文章に根ざし、権威や安全、あるいはデザインの問題によって形作られ、個人、コミュニティ、そして彼らの住む風景の主体化の中心となっている。ウィリアムズの作品や展示は、この過程を欲望の集積としてとらえ、それはあらゆる種類のバラックや監禁状態からの脱出の道であると同時に、人類の不安定な性質、生来の野性、その包括的な暴力性と官能性に対する率直な観察でもある。

主な個展に「Berlin Straße」Schiefe Zähne（ベルリン、2024 年）、「Eraser」Kunstverein Düsseldorf（デュッセルドルフ、2022 年）、「Picture the Others」MOSTYN（ウェールズ・スランディドノー、2022 年）、「High Horse」Kevin Space（ウィーン、2021 年）など。グループ展に、museo Madre（ナポリ、2024 年）、The Wig（ベルリン、2023 年）、Madeln Gallery（上海、2023 年）、Kunstverein Munich（ミュンヘン、2020 年）など。また、チューリヒ美術館（チューリヒ、2022 年）、KW（ベルリン、2020 年）でもパフォーマンスが行われた。2023 年、アンガラッド・ウィリアムズの作品集『Eraser』が After8 Books（パリ）から出版された。2025 年には、ロンドンのコンセントリック・グループとデッサウのバウハウス財団とともに限定版 12 インチレコードがリリースされる。

Angharad Williams ‘Eraser’, solo performance still at KW, Berlin, 2020. Photo: Giorgia Palmisano & Giulia Baresi.